

福祉系 対人援助職養成の 現場から⑦

西川 友理

「先生、結局“地域包括支援センター”って何なんですか。名前だけやったら何やってる所かも解らないですよ。僕、この社会福祉士の勉強してなかったら、自分の母親に必要なもって思ったとしても“地域包括”には行かなかったと思うんです。」

「うん、確かにそうですね。」

「どうしてもっと親しみやすい、何をやっているのか一発で解るような名前にしないんですかね。」

「うーん、そうですね…。」

と、会社勤めをしている受講生と話をして

いると、

「あっ、それなら私もある！」
と、隣で話を聞いていた専業主婦をしている受講生が声を上げました。

「私、社会福祉協議会が地元にもあるなんて知らなかったんです。地域の福祉について仕事をしている…って言われても、全然身近に感じたことない。」

「ああなるほど、そうかー、そうですね。」

「一応、教科書で読んで勉強したから、なんとなく解るようにはなったし、いっぺん

地元の社協に行ってみたら、と思うんですけど…特に福祉サービスが欲しいわけでもない、一般人が入っていい所なのかどうか、躊躇してしまいます。」

「そうですね…って、私、さっきからそうですねばかり言っていますね。でも本当に、社会福祉と普段関わりのない方にとってみたら“地域包括支援センター”“社会福祉協議会”なんて、得体の知れない名前に感じてしまいますよね。」

すると二人はこういいます。

「そうですね？もっと地域にアピールして欲しいです。」

「みんなにもっと活動の内容をわかってもらうようにしなきゃいけないですよ。」

「こんなのが一般企業なら、つぶれてますよ、とっくに！」

…うわ、キツイ言葉。

でも、何も言い返せません。

「二人とも、言っている事は間違えていないと思います。あの一、でも、実習に行った先では、もうちょっと、オブラートにくるんで意見して下さいね。」

養成校の種類と学生の特徴

現在、私は主に社会福祉士の養成に携わっています。

社会福祉士になるためには、国家試験を受験し、合格し、厚生労働省に登録されなければなりません。

社会福祉士国家試験の受験資格を取得するためには、11の経路があります^{注1)}。

4年以上の相談援助実務を経験している事、指定された学校で定められた科目を履修し卒業する事等の、いずれかの経路を選ばなければ受験資格は得られません。

社会福祉士養成に携わる学校は社会福祉士養成校と呼ばれ、規定の社会福祉士養成カリキュラムを実施している大学、短大、専門学校、短期養成施設、一般養成施設といった種別があります。

私が携わっている養成校は、卒業年度に受験が出来る4年制大学、卒業後1年間の実務経験を必要とする3年制の専門学校、年間数日の面接授業（スクーリング）と実習以外は自宅学習という通信制一般養成施設の3つです。それぞれの養成校はスタンスが違っています。

大学は、基本的に“学問をする場所”です。学問する事と専門職養成をする事をどのように共存させるのか、各々の学校がそれぞれのスタンスを示しています。

専門学校は“専門職養成をする場所”です。専門職を養成するためだけにカリキュラムが組まれています。

社会福祉士の一般養成施設は“社会福祉士の受験資格を取得させる場所”です。養成校ではない大学や短大を卒業した方や、相談援助実務を経験している方が対象です。

一般養成施設として登録されているところは、ほとんどが夜間課程か、通信課程です^{注2)}。

学校のスタンスが違うのですから、それぞれの学生の質ももちろん違っています。学生それぞれの背景や想いは様々で、一概にこうだとは言いきれませんが、それでもおおまかな傾向は見て取れます。

大学生は、福祉職に就きたい、福祉という学問をしたい、とりあえず学士の肩書きが欲しい等々と、それぞれの想いを持っています。

たとえ福祉系の学部・学科の課程に在籍しているからと言って、必ずしも将来福祉職を希望しているわけではありません。調査によれば、全国社会福祉士養成校協会に登録されている4年制大学において、2009年3月に卒業した学生のうち福祉職に就職した者の割合は、30%台となっています^{注3)}。社会福祉士などの福祉系の資格についても、その大学のスタンスとして資格取得に力を入れているか否かということに、大学生は流されがちです。

専門学校生は、卒業後の就職先を既に福祉系と定めて入学してきます。また、各種専門職資格の取得についても、就職のためのマストアイテムとして考えている専門学校生が多く、専門学校側もそれを奨励しています。

大学生と専門学校生、この二者に共通する点は、高校卒業後、または1～2年の浪人生活を経て入学する場合がほとんどであり、学校社会を中心とした社会環境で生きてきた方達であるということです。

これに対し一般養成施設の受講生は、そのほとんどが現在いずれかの業界に属する社会人です。現在の生活を営みつつも、受

験資格を取得し合格したいと考えている方達です。

いずれにしても、養成校として伝えるべき教育内容に変わりはありません。しかし、社会人経験を有する一般養成施設の受講生に対しては、大学生・専門学校生と比べて、その伝え方やプロセスがずいぶん違ってくるのです。

一般養成施設の受講生の背景

一般養成施設の受講生の職業で、最も多いものが福祉職です。社会福祉の現場で、介護福祉士、ケアマネジャー、保育士等として働いている方が、社会福祉士資格取得によるキャリアアップをめざして受講されています。

一方で、このような方達も増えてきました。

「定年退職後の社会貢献に生かそうと思って…。」

「自分が子育てに苦労したから、子育ての支援が出来る仕事がしたくて…。」

「職場に障害のある方が就職して来て、そこから興味がわいて…。」

「ホームレス特集のTV番組を見て、どうにかしたいと思って…。」

あるいは教育関係者、刑務官、企業の人事担当者といった方達もいます。

近年、年金や介護といった社会問題に、自ら直面したり、報道で知ったりと、身近に感じられるようになった事により、それまで社会福祉と無縁で生きてきた方達が、社会福祉に興味を持って勉強に来られるのです。

また、教育、司法、就労支援等々、社会福祉士の業務分野が広がるにつれて、各分

野に関わる方達の入学も増えてきました。

かくして、面接授業では、それはもう様々な背景を持った方達が、1つの教室で、1つの演習課題に取り組むこととなります。様々な価値観がぶつかり合い、活発な演習となります。

特に、社会福祉分野以外の職場で働いている方達は、社会福祉分野の価値観に面食らうようです。

「え、権利には義務がつきものよね？権利の勉強ばかりして、義務の勉強はたったこれっぽち？」

「福祉って、こんなに理論や理念があいまいで、統一されてないの？」

「専門職なのに、これでバッチリ、っていう支援方法なんてのは無いんですか？」

「“地域に根ざした福祉活動”というけれど、地域住民である私は、こんな福祉活動があるなんて全然知らなかった。」

さらには、

「自立支援とか言って、結局ほんまに困らないと、何にもしてくれへんやないですか。」

“ふくし”って、福を止めるって書いて“福祉”と書いたほうがええくらいや。」

などと怒ってしまう方も出てきます。

福祉は特別な仕事？

単純に善いものだと思って勉強を始めたけれど、社会福祉って、何か変だ。ちょっと独特。どうやら善いものだけではないようだ。そう気づき始めた受講生に、

「いえいえ、社会福祉ではこのように考えるのです。」

と、教員である私の立場で、その場をおさめることは出来るでしょうし、この受講生達は“資格取得”のために来ているのだから

ら、そんなところで立ち止まらせず、受験合格を目指して勉強を頑張るように強引に指導するのが良いのかもしれませんが。

しかし、彼らの言葉は単純に受け流してよいものとは思えないのです。

「社会福祉は、他の分野や一般企業とは違うからね…。」

そう口にする事によって、自ら他分野との間に壁を作り、さまざまなものの見方が、社会一般の見方とどんどん離れ、ひとことで言うと、社会福祉分野全体が、引きこもりがちなどころがあるように感じるからです。

果たして、社会福祉分野の仕事は、そんなに特別なものなのでしょうか。

「受験合格のためには、額面どおりに覚えておきましょう。けれども、もう一步踏み込んで考えなければいけない大切なところだと思っています。」

そう言って、受講生と思索を深めています。

他分野から来た方達が、大活躍

ここ数年、気になっている事があります。全くの主観ですが、社会福祉分野で注目される新しい事業を立ち上げている方達は、生粋の社会福祉分野の方達よりも、他分野の仕事を長年勤め、転進して来た方達のほうが、ずっと多いと感じるのです。

例えば、地域の保健センターが主催した男性料理教室で、たまたま出会った定年退職後の元サラリーマンの方達。「地域に根付いた活動をしたい」と意気投合し、地域貢献活動をするグループをつくり、高齢者施設などを訪れ、うどん打ち等のボランティア活動を行っていました。

その方々がその時に見たデイサービスの

内容が、唱歌を歌ったり、手芸をしたり、女性達がたくさんおしゃべりをしたり…いわば、奥様方のサロンのようなところが多かった。

「こんなデイサービス、僕ら行きたいかな。」

「行きたくないよな。」

「よし、それじゃあ自分たちが行きたくなるようなデイサービス、作ってやろうじゃないか。」

プログラムには、麻雀があり、ワインを飲む会があり、雑誌コーナーにはサラリーマン向けのグラビア雑誌もある。(ちなみに麻雀については、今でこそ、認知症予防として導入する高齢者施設が増えてきましたが、最初に始めたのはおそらくこの方達ではないかと思われます。)かくして、東京都杉並区に“松溪ふれあいの家”というデイサービスが誕生しました。

開所以来、利用者の7割が男性という“男が行きたいデイサービス”です。TVや雑誌等の様々なメディアでも紹介されました。2005年9月号の『月刊生活と自治』のインタビューに対しては「心を満足させるプログラムさえあれば経営は成り立つのです」と意気軒昂におっしゃっていました。

「社会福祉現場はこうあるべき」「デイサービスのプログラムといえばこれ」という固定観念がない方達が作ったデイサービスが、ユーザーフレンドリーに満ち溢れている。だから、経営が成り立っている。

社会福祉の現場職員がユーザーフレンドリーを考えていないわけではありませんが、しかし、社会福祉しか知らない方達には、往々にして、社会福祉の固定観念が邪魔をしがちである、と思うのです。

昔アパレル関係で働いていたAさん、建

築事務所を早期退職して福祉系NPO法人を立ち上げたBさん、一般企業の経理から、施設の事務長になったCさん、人材コンサルタント業から転身して福祉業界で働いているDさん。私の知り合いをざっと思い出しただけでも、社会福祉分野に他分野から来た方達は、本当に活発に働いておられます。そして皆さん、異口同音におっしゃいます。

「社会福祉の人は甘い。守られてきた体質から抜け出せていない。」

「自分たちで開拓して、今後活かしていく力が足りないように思う。」

「マーケティングが下手。」

生粋の社会福祉分野の方達が20年かかっても成し遂げられないことを、他分野から来た方達は、10年そこそこで新しいカタチで成し遂げてしまう。そんな印象すら持つことがあります。

仕事は誰がために

内田樹は、「人は贈与するために働く」と様々な所で書いています^{注4)}。自分のために働くのなら、自分が“もういいや”とやめてしまえば、自分が嫌な目に合うだけです。しかし、誰かのために、という理由で働く時、人は簡単に“もういいや”とはなりにくい。つまり、誰かのために働く時、人は最も高いパフォーマンスを示すと言えるでしょう。

そういえば…ラーメン屋、魚屋、銀行員、とび職、図書館司書、デザイナー、俳優も…どのような職業であっても“誰か”のために働いています。

まずは“自らとその家族のため”衣食住を満たす、生計を立てる手段として働きま

す。その働きの中で“お客様のため”、相手の満足や喜びは何かと考えて働きます。

これら2つはどのような職業であっても共通していると思います。

自分に関わる人達を意識し、仕事の対象である人達を意識し、その人達を幸せにしたいと思う時、素晴らしい働きがなされます。つまり自らの幸せだけではなく、関わる人達の幸せをも実現できる仕事は、社会的に大きな意味を持つものになるのです。

特に福祉の仕事をしてきたわけではない、専業主婦やサラリーマンなどの一般養成施設の受講生は、社会福祉の仕事は、単に“相手が幸せになるように”という目的がクローズアップされているだけであって、その他の仕事と同じく、社会にある仕事のひとつなのだと理解していると感じます。

社会福祉分野の仕事は、法律に基づいており、その対象は“幸せを得難い状況にある、今、ここにいる人(=利用者)”であることが多いです。

「制度や政策がもっと充実していれば、利用者にもっとよいケアが出来るのに」という言葉を、社会福祉分野の従事者からよく聞かれます。利用者の幸せを考え出る言葉です。この発言には、“社会福祉の仕事は、利用者のために”という考え方が表われています。

確かに、社会福祉の仕事は、“利用者のため”でもあるのですが、それだけには収まらず、その仕事は、利用者の家族のためでもあり、その地域全体のためでもあり、社会全体のためでもある。社会福祉の仕事は、それら全てが満ち足るようにする難しい仕事です。さらに言えば、自身と家族の生計を立てるため、つまり自身のためでもあります。

社会福祉制度・法律は未だに不完全ですが、社会の全体を見る視点から考えられているのだということを、社会福祉分野の従事者は忘れてしまいがちなのではないのでしょうか。

この忘れてしまいがちな状況に対し、社会福祉分野でよく言われる言葉は「社会を見る」ということです。

ところが、これに関しても疑問が生まれます。

一体“社会”って何なんでしょう。

社会福祉が見ている“社会”

現在のわが国の福祉の理論的な根本を作ったといわれている人物のひとり、岡村重夫は「社会関係の主体的側面への介入（個人が社会制度に働きかけるその時の不具合に対する介入）」が社会福祉の固有の対象領域だと提唱しました。

また、「人と環境の交互作用」という言葉があります、人は単体で存在しているのではなく、その環境、状況の中、様々な社会の在り様と関係してそこに存在している、という考え方で、近年の代表的な相談援助モデルの1つである生活モデルの中の重要な概念です。

これら2つは、福祉の専門教育を受けたことのある方なら絶対に聞いたことがあると断言出来るほど、社会福祉分野における重要なパラダイムです。

これらに代表されるように、社会や環境といった言葉は、社会福祉分野では多用されています。そもそも、社会福祉という言葉からして、単なる“福祉”ではなく“社会”という言葉がついてまわるのです。

「岡村重夫は“社会関係の主体的側面”っ

て言っていたし、“人と環境の交互作用”なんて言葉も、福祉分野ではよく使う。“社会”福祉なんだから、社会をしっかりと見ているはず。…なんだけれど…何か違うんだよねあ…何だろう…」と、私はずっと違和感を持っていました。

個人だけではなく、社会も見えないと、社会福祉の援助は出来ない。

では、社会福祉分野の人が言う社会とは、一体どんなものなのか。

最近、ひとつ気付いたことがあります。

社会福祉分野の従事者が、社会を見ていると主張する時の、その社会とは、利用者の目を通した社会なのではないか、ということ。ある利用者がいて、その方の関わる環境を見ることイコール社会を見る、と言っている。つまり、利用者和社会を同時に見ているようでありながら、その実、利用者側に寄り添い、偏った社会を見ている。結果、利用者が参画しようとしている、社会そのものを、客観的に見ていないことの方が多いのではないか、と思うのです。

これに関しては、一般企業の経営者の意見が参考になると思います。

「商売や生産はその商店や製作所を繁栄させることにあらず、その働き、活動によって社会を富ましめるところにその目的がある」と、松下電器（現パナソニック）初代社長、松下幸之助は残しています。

ユニクロで有名な㈱ファーストリテイリングの会長兼社長である柳井正さんは、企業の社会貢献について「社会にとって意義がある、社会にとってその企業がいった方がいい、そういう企業じゃないと生き残れない」^{注5)}との考えを述べてらっしゃいます。

私は経済学については門外漢ですが、そ

の私から見ても、優れた創業者・企業人と
言われる方達の言葉には、自らが生き残る
ための利益を出しつつ、利益を生み出して
くださるこの社会を“どうやって良くして
いくか”という考えが必ず潜んでいるよう
に思います。

社会福祉分野にはこの10年の間に、契約
の概念が入り、経営の原則が規定され、業
務分野の拡大とともに他分野の方達との関
わりが盛んになってきました。また、景気
の悪化につれて、社会福祉制度をはじめ財
政の適切な運用について言及する特集を、
TVや雑誌で目にするようになってしまし
た。つまり、社会福祉分野以外の方達から、
「で、結局、福祉サービス（社会福祉）っ
て、何のためのものなの？」
と、問われてきているように感じます。

社会福祉分野の従事者は、この質問に対
する“答え”持たなければならないと思っ
ています。

ではその“答え”を導き出すため、客観
的な視点からこの社会を見る時、社会福祉
分野の従事者はどのような立場で考えれば
よいのでしょうか。

これは私の中でもまだ整理がついていま
せん。

ただ、現在、社会福祉分野の従事者が社
会を見る時、そこには往々にして客観的な
見方や冷静な判断力が不足しがちだとい
うことは強く感じます。いったんそこから離
れて、“別のどこか”から、社会を見ないと
いけないのではないのでしょうか。

.....

注1) 社会福祉振興・試験センター 資格
取得ルート図

<http://www.sssc.or.jp/shakai/shikaku/rout>

[e.html](#)

注2) 2011年11月16日現在、全国に
54校64課程あります。このうち8課程を
除き、夜間課程か、通信課程となっていま
す。

注3) 2010年度 全国社会福祉教育セ
ミナー シンポジウム「社会福祉分野にお
ける就職状況の分析と教育のあり方を探
る」において 日本社会福祉教育学校連
盟・社会福祉専門教育委員会報告より。

注4) どこから引用すればよいか迷うほ
ど、色んな所で書いていらっしゃる。ま
とりあえず、手近にアクセス可能なブログ
『内田樹の研究室』
(<http://blog.tatsuru.com/>)より。

…「「働く」というのは、本質的には「贈与
する」ということであり、それは人間の
人間性をかたちづくっている原基的な
ものなみである。」『人間はどうして労働するの
か(2009年12月16日)』

…「自分のために、自分ひとりの立身出世
や快楽のために生きている人間は自分の
社会的能力の開発をすぐに止めてしまう。
「まあ、こんなもんでいいよ」と思ったら、そ
こで止る。でも、他人の人生を背負って
いる人間はそうはゆかない。人間は自己利益
を排他的に追求できるときではなく、自分
が「ひとのために役立っている」と思えた
ときにその潜在能力を爆発的に開花させ
る。」『格差と若者の非活動性について(2011
年10月18日)』

…ところで今回この文章を書くために色々
調べてみましたが、こういった考え方を、
“贈与経済”というらしいです。

注5) 『知る楽 仕事学のすすめ』「わがドラ
ッカー流経営論 第4回 企業は社会の道
具」NHK教育 2009年6月25日放送